

分科会 8 概要報告書

分科会名	分科会 8 イクメンってどんな存在？～女子会トーク～		
実施日	平成 24 年 2 月 18 日 (土)	実施時間	13:00-15:00
会場	淡海 1. 2	参加人数	252 人
登壇者	兵庫県尼崎市長 稲村 和美 (株)ワーク・ライフバランス 代表取締役社長 小室 淑恵 AERA 副編集長 浜田 敬子 子育て情報誌「ピース맘」編集長 廣瀬 香織 (株)東レ経営研究所 ダイバーシティ&ワークライフバランス研究部長 渥美 由喜		

概要報告書

1. 自己紹介

コーディネーター：渥美 由喜

株式会社東レ経営研究所 ダイバーシティ&ワークライフバランス研究部長。厚生労働省イクメンプロジェクト、内閣府男女共同参画委員。これからの人口減少社会の中、いかにして日本社会が活力を維持するかというテーマで、少子化対策などに取り組んでいる。近年では福井県の企業による『企業子宝率』をサポート。

プライベートでは二児の父であり、2回、育児休業を取得。家事・育児のほか、老父の介護、次男の看護などに取り組み、まさにワークライフバランスと格闘している。

浜田 敬子

雑誌「AERA」副編集長。2006 年に出産。当時朝日新聞社で管理職の女性の出産は初めてのケース。10ヶ月後に復職すると同時に、同じ朝日新聞社に勤める社会部記者（当時）の夫が、入れ替わり 3ヶ月の育児休業をとる。

現在は両親に隣に住んでもらい、イクメンの夫に加え、いわゆる『イクジイ』『イクバア』のサポートによりジャーナリストとしての激務をこなしている。

小室 淑恵

株式会社ワークライフバランス代表取締役社長。900 余りの企業の働き方を見直すコンサルティングを実施。内閣府の委員など複数の公務を兼任。一児の母の顔を持つ。

稲村 和美

兵庫県尼崎市長。兵庫県議会議員のときに出産、鋼材会社を経営する夫と、お互いの仕事やライフスタイルを尊重しながら子育てしている。

廣瀬香織

滋賀県の子育て情報誌「ピース맘」編集長。第 1 子を出産後、フリーペーパーのライターの仕事に就き、徐々にキャリアを築いてきた。

2. パネルディスカッション

「イクメンについて女性達が本音で語る、女子会トーク」というコンセプトのもと、アフタヌーンティーパーティー形式でパネルディスカッションが行われた。

コーディネーターであり唯一の男性である渥美氏は、“話のテーマが変わるタイミングで、おいしいお菓子をサーブするボーイ”というスタンスで、彼女たちの本音を引き出していく。

■ 自分でイクメンとアピールする男性について

浜田：AERA で『イクメンというな』という企画をやったことがある。働くママの間で「ちょっと育児にかかわっただけで威張られてはたまらない」という声がよく上がっていたので。

稲村：女性は、自分と夫とを比べている。ところが男性は、世の夫の平均と比べて「俺はこれだけやっている」と思う。そこが女性としてはおかしい、不満に感じる場所。

浜田：働いているお母さんは誰にもほめてもらえない。夫と実の母が2人して「もう少し早く帰ってきたら」「娘と一緒にいる時間をもっとふやせないか」と言ってくると、ズドンと落ち込んでくる。

小室：その罪悪感から夫を余計にほめたくなくなり、悪循環になることも。長い目で見て、自分に返ってくるよう夫をほめるのも必要かもしれない。

廣瀬：親が忙しくて辛そうにしていると、子どもにも悪影響。楽しくあるべきだと思うようになった。自分が楽しそうだと、家族も応援したくなるのではと思う。

■ 子どもを出しにして遊ぶ男をどう思うか

稲村：それはいいことだ。うちの夫を見ていると、子どもの遊びにもつきあいつつ、自分の好きなジャンル（歴史）にもうまく引き込んでいよう。

小室：うちもパパ友たちでフットサルに夢中。子どもの練習タイムを設けたり、交代で子どもたちの見張り番も決めて、自分たちも楽しみつっ、ママたちを3時間くらい子どもから自由にしてくれている。

浜田：一緒に遊んでくれると、それだけママがフリーになれるのはいいこと。

廣瀬：息子のカブトムシ飼育などは、私にはつきあえないジャンル。そこを担当してくれると、ありがたいと思う。

■ イクメンにときめいたり、セックスアピールを感じることは？

浜田：うちの女性部員は30代~40代が多いが、彼女たちは結婚するなら家事も育児もやってくれる男性がいいとわかっているのに、好きになるのは俺様タイプだと。イクメンはモテるが、30代後半から上の世代アピールできないかな。

小室：大学生くらいの世代で将来も仕事をしたいと思っている女性は、イクメン度をすごく重視している。若い女子には、イクメンの重要性が刷り込まれてきているかもしれない。

■ 子育ては期間限定というが。

稲村：男性は、本来は母親がやるべきものをちょっと手伝う、というのではなく、最初から一緒に責任を持って育てていこう、関わっていこうと思ってほしい。

小室：最近イクメンになる男子は、自分が子どもの頃、父親と接点がなかったという子が多い。反面教師的に、将来は自分の父親のようではない父親になろうとしている。男の子が多感な時期にこそ、男親がコミュニケーションを取ることが大事なかもしれない。

浜田：最近の大学生は、就職活動のときに、親に勧められて会社を選ぶ子が多い。親の世代の価値観でのいい企業と、現在のいい企業は全然違うから、できれば自分で判断してほしいのだが、親離れ・子離れができていないケースが多い。自分の子どもには、できるだけ自分のことは自分で決めてほしい。子

育ては永遠だと思ってくれるけれど、むしろある意味では、子どものほうから早く卒業してもらいたいという希望がある。

■夫婦ゲンカになることは？

小室：子どもが小さい頃、熱を出した日の朝は『どっちの仕事が大事か』競争になり、緊張感が走ったものだった。

廣瀬：子どもの病気のときなどは、やはり私が子どもを見ることになる。そうしたときに、無言で出ていかれると腹が立つが、「仕事は大丈夫？」と一言たずねてくれるだけで、ずいぶん気持ちが救われる。

浜田：今は相対的に夫のほうが、時間の調整が付きやすい部署にいるので、圧倒的に忙しい私に仕事優先にさせてくれと言っている。それでも数ヶ月に1回はケンカになる。

稲村：いざというときには、家庭を横において仕事に専念しなければならない。そういう思いがあるから、逆に可能なきは家に時間を使うようにしている。

小室：起業したてのころは、社長である自分の代わりはいないとがんばっていたが、体調をくずしたときに部下が大きな商談をまとめてきた。最初こそショックだったが、基本は私にしかできない仕事なんてない、と考え方を切り換えた。自分がどうなっても大丈夫な職場をつくることのほうが、むしろ大事かもしれない。

■これからのイクメンに望むこと

小室：自分が仕事を切り上げて帰れるのがイクメンのファーストステップとするなら、次はチーム全員が帰れる職場をつくる、そんなイクメンに進化してほしい。ありがちなのが、「妻がこわいので帰ります」と恐妻家的ポジションをとるイクメン。妻と子どもを愛しているので帰ります、というポジションに変更してくれればうれしい。

浜田：女性も最初から母親になれるわけではないと、子どもを産んで本当にわかった。イクメンも、子どもが2~3歳になってからではなく、一緒にやってほしい。女性が一番辛いのは、出産直後に育児休業をとっている期間。身体も疲れているし、精神的にも不安定。そのときのママへのフォローもぜひやっていただきたいと切実に思う。

廣瀬：イクメンに定義はない。イクメンが普通になって、あの人はイクメン度がすごい、というのが逆になくなればいいと思う。

稲村：子育て中は、ワーキングウーマンだけでなく、専業主婦も同じ悩みを抱えているのかもしれない。立場の違いを超えて、お互いに想像力を働かせて一緒に協力し、進化していきたい。

備考

- 98名の方からアンケートを回収し、多くの方から貴重な意見をいただいた。
- 会場から多くの質問が寄せられ、大変盛り上がった。
- 男性だけでなく女性の参加者も多く、頷きながらパネリストの発言に耳を傾けていた。